

〈要約〉

合理性・主観主義・解釈学：オーストリア学派経済学の展開

Rationality, Subjectivism, Hermeneutics: the Development of Austrian Economics

原 谷 直 樹
Naoki Haraya

合理性、主観主義、解釈学という三つの観点に着目して、オーストリア学派経済学の展開を明らかにすることが本稿の目的である。まず、本稿の検討対象であるオーストリア学派について、始祖メンガーから現代に至る系譜をたどり、その歴史的変遷と外部からの評価の浮沈を提示する。次に、社会主義経済計算論争に着目し、そこでの合理性をめぐる論争がどのようにオーストリア学派の理論的彫琢を促し、現代オーストリア学派としての性格を有するようになったのかを示す。続いて、現代オーストリア学派の代表的論者の一人であるラッハマンの急進的主観主義を取り上げて検討し、それが市場プロセスの多層的理解と「理解の方法」へとどのように結び付けられているのかを明らかにする。最後に、ラッハマンの「理解の方法」を進化させたラヴォアによる解釈学の導入について検討し、オーストリア学派のさらなる展開の可能性を提示する。